

シカの個体数管理に向けてー

●岐阜県におけるシカの管理計画

岐阜県では、平成23年3月に岐阜県特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）（第一期）を策定しニホンジカ（以下、シカ）の保護管理に努めています。平成24年8月には計画の一部変更を行い、計画期間中に年間15,000頭の捕獲を目指し、生息密度を低減することにより被害の軽減を図ることなどを盛り込んだ変更計画を策定し、シカの保護管理を行っています。



図1 シカによる採食を受けた植栽木

※何度も採食されると樹は盆栽状になり、正常な成長が見込めなくなります。

右上は採食された箇所の拡大図。



図2 シカに樹皮を剥がされた樹

※樹皮を剥がされると、変色などにより材価が著しく低下します。

●シカの管理計画

当たり前の話ですが、生息密度の低減を目的とした捕獲を行う場合は、出産などにより年間にシカが増える頭数を上回るように捕獲目標を定める必要があります。そうしないと、捕獲を行っているのに一向にシカは減らず、むしろ増加しているといった事態にもなりえます。シカは生息条件が良い場合、年間20%以上の割合で個体数が増加するといわれており、そのような懼れが高いと考えられます（図3参照）。

そのため、様々な情報からシカの個体数について推定し、捕獲計画を立案していく必要があります。

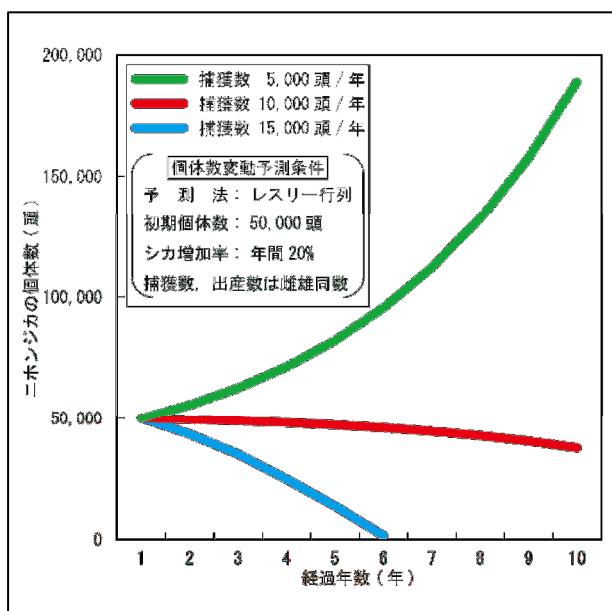


図3 シカ個体数の変動予測

●シカを効率よく捕獲するには

県内では狩猟者が減少傾向にあるため、捕獲目標を達成するためには従来の方法に比べより効率的で省力的にシカを捕獲する方法を考えておく必要があります。

そのためには、シカを効率的かつ省力的に捕獲しやすい場所におびき出す必要があると考えました。そこで他県において、一年を通して多くのシカに利用されている牧草地がその候補地になると考え、岐阜県内の牧草地におけるシカの出没状況を調査しました。

●牧草地におけるシカの出没状況

調査はライトセンサスによって、牧草地内に出没しているシカの頭数をかぞえることによって行いました（図4）。

調査を実施したすべての期間において、牧草地内へのシカの出没がみられました。

また、出没数は春（4～5月）に多く、夏（6～8月）かけて少なくなり、秋（9～10月）に再び多くなるという傾向がみられました（図5）。

これは、雪解け直後の春には牧草地の周辺森林に餌資源が少なく、牧草地内には牧草の芽吹きなどの餌資源が多くあるためにシカが多く出没したと考えられました。一方、8月にかけて徐々に周辺森林内の餌資源が増加し、それらの餌資源を利用できるため牧草地内へのシカの出没が少なくなったと考えられました。これらのことから、周辺森林に餌資源が少ないと考えられる時期に期間を限定することによって、効率的かつ省力的にシカを牧草地内に誘引することができる可能性があると考えられました。

●今後に向けて

今後は以上のこと踏まえ、牧草地内の捕獲しやすい場所にシカを誘引する方法などについて検討を重ね、効率的かつ省力的にシカを捕獲する方法について検討を重ねていきたいと考えています。

本研究は公益財団法人小川科学技術財団による助成を受け、特定研究助成課題「ニホンジカの適正な個体数管理に向けた誘引方法に関する研究」により実施しました。



図4 ライトセンサスで確認されたシカ

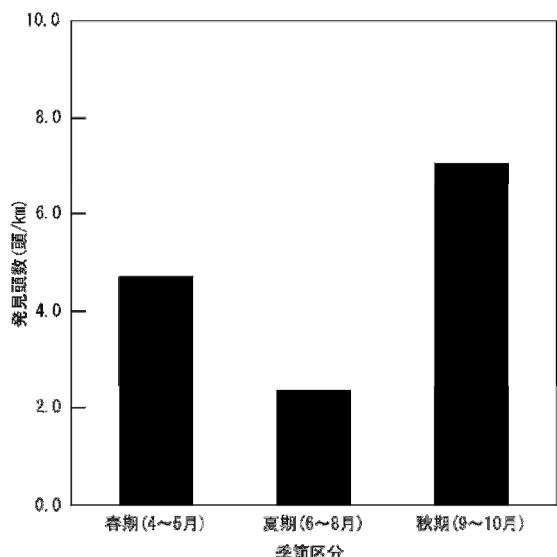


図5 ライトセンサス結果